

ジュウジミズギワコメツキの形態について

大 平 仁 夫

Notes on the Morphological Structure of *Fleutiauxellus cruciatus* (Coleoptera, Elateridae) from Japan

Hitoo ÔHIRA

Kitsuneyama 6-4, Maiki-chô, Okazaki, 444-35 Japan

Abstract *Fleutiauxellus cruciatus* (CANDÈZE, 1873) was originally described from Japan, under the name of *Cryptohypnus cruciatus*, on the basis of only a single specimen. Some variations of elytral maculation (Fig. 1) and general structure examined by SEM-images (Fig. 2) are described for facilitating recognition of this species in the Negastrinae of Japan.

本種は、日本に分布する上翅に黄紋を有するミズギワコメツキ類のうちでは、体が大型で黄紋が目立つ美麗種のため、一般にも比較的よく知られているが、詳しい形態などについてはよくわかっていないので、ここにその概要を報告することにした。

分布・生態について

本種は、最初ただ 1 頭の標本にもとづいて、CANDÈZE (1873) により *Cryptohypnus cruciatus* と命名、記載されたが、正基準標本の詳しい産地は不明である。しかし、この論文で扱われた種は、G. LEWIS が 1869~1871 年の間に、主として九州の長崎、鹿児島や本州の神戸あたりで採集されたものであると前書きに記されている。その後、G. LEWIS (1894) の研究では、本種は末尾のリストの中に種名があるのみである。MIWA (1934) のモノグラフでは、東京の玉川河畔で得られた標本が検視されているが、付図 (pl. 3, fig. 9) は神戸産の個体である。また、KISHII (1976) が徳島県から本種として記録した種は、その後の同氏の研究で別種であることが判明している (KISHII, 1985)。このように、今までの分布の記録をみると、本種の近畿地方以西からの確実な記録はなく、原記載の個体ももし本州西部地方のものであるとしても、MIWA (1934) の神戸が唯一の確かな産地だということになる。九州には本種は分布しないと思われる。以上のことから、KISHII (1985) が新種として記載した *Migiwa (Migiwa) katamon* カタモンミズギワコメツキと本種との関係についてもさらに詳しい検討が必要だと思われるし、今まで本種として扱われてきた種が、原記載で扱われたものと同種であるかどうかについても、今後さらに調査が必要だと思われる。

本種の分布はかなり限られているようで、およそ中部地方から関東地方にかけてがその範囲に含まれると思われる。もっとも北部の記録は新潟県である (岸井・馬場, 1957)。また、市橋氏が三重県で

得られた 1 雌個体が筆者の手元にあるので、西部地域は三重県あたりまでだろうと思われる。

本種は愛知県ではむしろ低地性で、豊川河畔では河原に生えているヤナギ類の葉上でよく見出される。おそらく、これに寄生するアブラムシ類の甘露などを舐食するために飛来するもので、幼虫の生息場所は河原の砂礫中である。また、矢作川河畔では、成虫を笹の葉上やノイバラの花上からも得ている。しかし、どこでも発見できるわけではなく、発生地はかなり限られているようで、他のミズギワコメツキ類が見出されても、本種がまったく生息しないところも多い。成虫の発生期は 5 月から 7 月頃である。

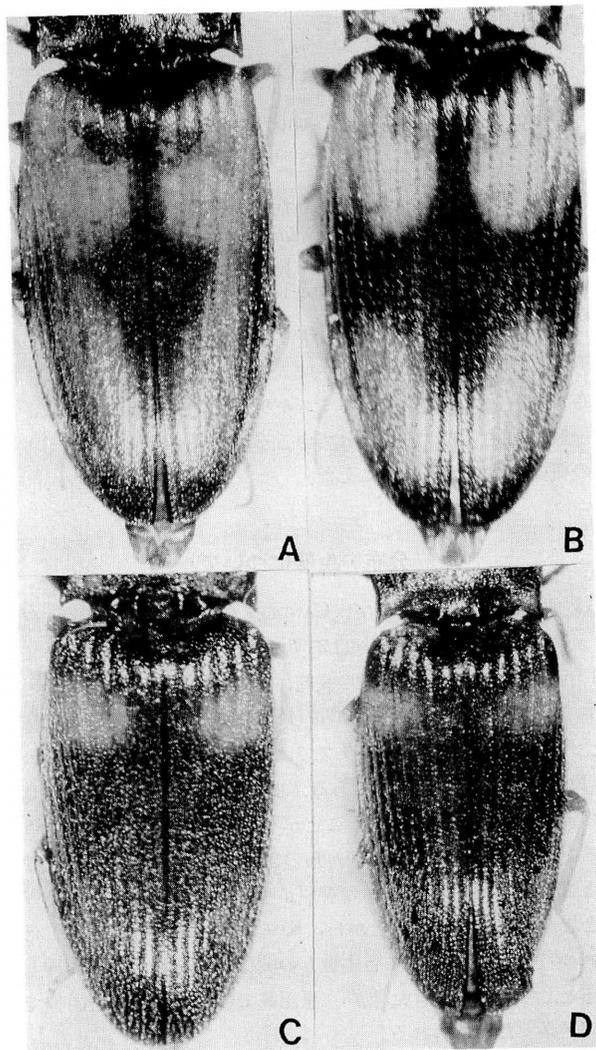


Fig. 1. Variation of elytral maculation in *Fleutiauxellus cruciatus*. A and B are females; C and D are males; all from the riverside of the Toyogawa in Aichi Prefecture, Central Japan.

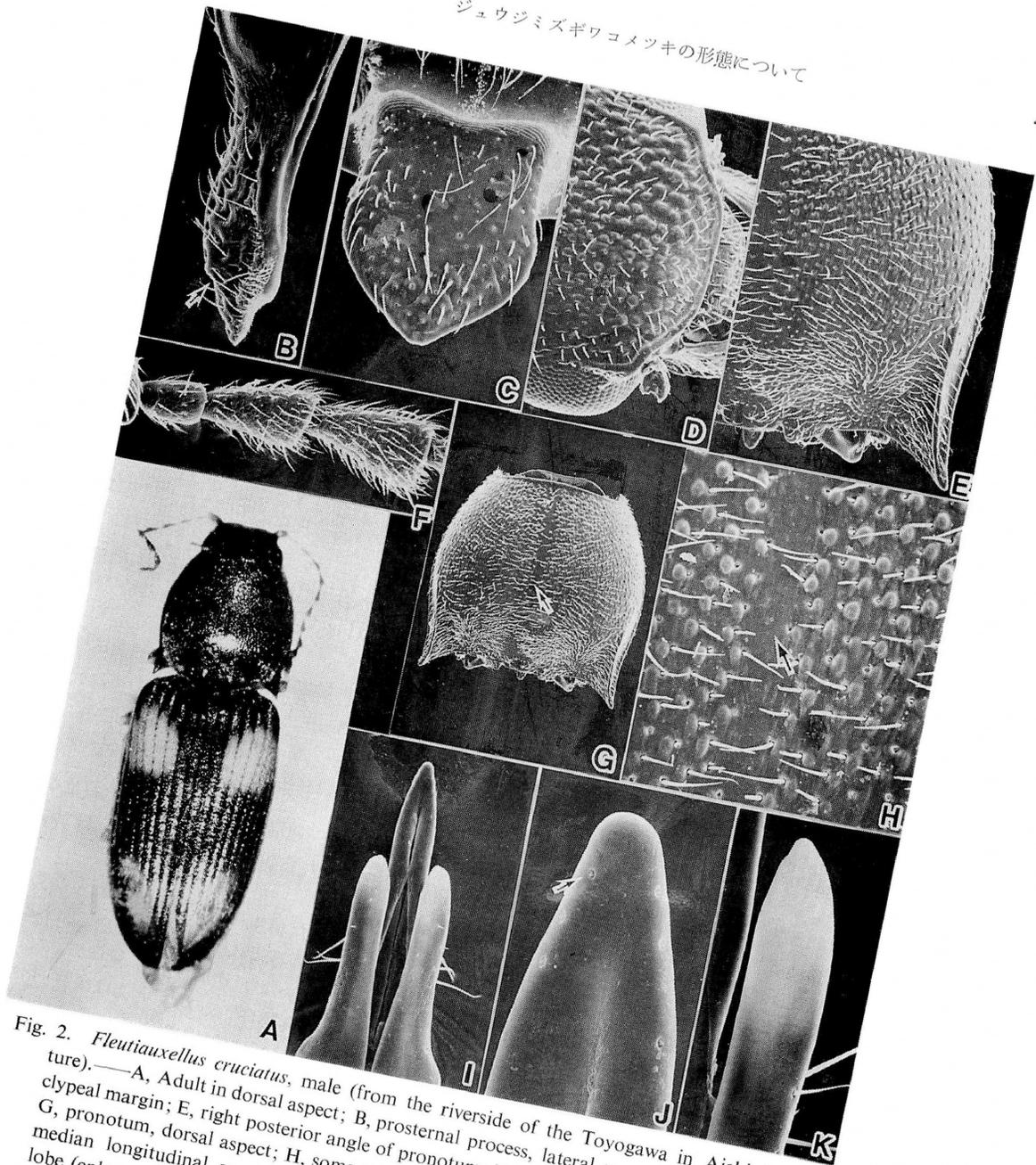


Fig. 2. *Fleutiauxellus cruciatus*, male (from the riverside of the Toyogawa in Aichi Prefecture).—A, Adult in dorsal view; B, prosternal process, lateral aspect; C, scutellum; D, clypeal margin; E, right posterior angle of pronotum; F, 2nd to 4th segments of left antenna; G, pronotum, dorsal aspect; H, some punctures on the disc of pronotum (arrow indicates median longitudinal smooth line) ($\times 300$); I, aedeagus, ventral aspect; J, same, median lobe (enlarged); K, same, lateral lobe (enlarged).

成虫の一般形態

雄. 体長は 3.5~4 mm 内外. 体は幅広くてやや扁平状, 黒色で光沢を有し, 全面に灰黄色毛を生ずる. 触角の第 1 節の前半部, 第 2 節は黄褐色~暗黄褐色 (残りの節は黒褐色). 肢の転節, 腿節の末端部, 脛節と付節 (第 4~5 節あたりはやや暗色) は黄褐色~淡黄褐色を呈する. 上翅の紋は黄褐色で, 前紋は肩角部から第 1 間室へ伸長する楕円形, 翅端近くにも縦位の楕円状紋を有する (Fig. 2 A).

頭部はこぶ状の小隆起を散布し, 前頭横隆線の前縁は弱く切断状, その内側部は扁平である (Fig. 2 D). 触角は末端が前胸背板の後角よりやや長い程度, 第 2 節は短小で円筒形, 第 3 節は弱い三角形で, 第 2 節の約 1.6~1.7 倍の長さ, 第 4 節から鋸歯状を呈し, 第 3 節よりやや長い程度である (Fig. 2 F).

前胸背板は幅と長さがほぼ等しく, 中央部においてもっとも幅広い (Fig. 2 G). 背面は膨隆し, 正中部には平滑隆線をもつ (Fig. 2 H の \ 印). 隆線周辺部の表面には小点刻を散布, その外側はこぶ状に隆起し, 前半部ではより顕著に発達する (Fig. 2 H). 後角は短く後外方へ突出し, 背面の隆起線は側縁に沿って前方へ伸長, 前胸背板の長さの 1/4 近くまで達する (Fig. 2 E). 前胸腹板突起は, 前肢基節腔を越えて弱く内方へ湾曲, それより末端に伸長し, 外側面は末端近くで弱くくびれる (Fig. 2 B の / 印). 小盾板は舌状, 末端は鈍くとがる (Fig. 2 C). 上翅の条線は明瞭に印刻され, 間室は不規則な横しわ状である.

交尾器は図示 (腹面) したようで, 細長く, 中央突起は末端に向かって漸次細まり, 末端はとがらない. また両側部に生ずる感覚点刻は, 本種では比較的小型である (Fig. 2 J の / 印). 側突起の両側は平行状で, 末端は細まって弱くとがる (Fig. 2 K).

雌. 一般外形は雄に類似するが体はより大きく, 大きいものは体長 5 mm 近くに達する. 触角は短く, 末端は前胸背板の後角よりやや短い, また, 第 3 節は円筒状で, 第 4 節とほぼ等長である.

上翅の黄紋について

本種の上翅の黄紋には特徴があり, 一般に前紋は横位の楕円形で, 翅端部近くにある後紋は縦位の楕円形である (Fig. 2 A). また, 雄のものより雌の斑紋の方がより大型で明瞭な場合が多く, 雄では小型で暗色化の傾向がみられる (Fig. 1 A-D).

図示 (Fig. 1) した上翅の黄紋は, 豊川河畔の同一場所で得られた個体間の変異を示したもので, A~B は雌で C~D は雄である. 黄紋がよく発達した個体では, 前紋と後紋が連続している. しかし, このように発達した場合でも, 前紋は会合線間室まで伸長していない (Fig. 1 A). 紋はやや大型であるが, 一般には図示 (Fig. 1 B) した程度までである. 本種の典型的な紋の現われ方は図示 (Fig. 2 A) したようで, 前紋は第 2 間室あたりまで, 後紋も会合線間室までは伸長しない.

黄紋が小型で暗色化する傾向は, 雄に多く現われる (Fig. 1 C-D). 黒化のやや進んだものでは後紋が不明瞭に認められる (Fig. 1 C) が, 黒化のより進んだものでは, 後紋が完全に消失している (Fig. 1 D). なお, 上翅がまったく黒化した個体にはまだ接していない.

本種の前紋は, 横位の楕円形で特徴があるので, 近似種とは識別できるが, 紋の形や大きさには前述のような変異があるので, 同定には他の形態も比較する必要がある.

調査標本

10♂♂, 15♀♀, 岡崎市矢作川河畔, 23-V-1954, 大平採集. 5♂♂, 6♀♀, 豊橋市豊川河畔, 8-VII-1990, 大平採集; 9♂♂, 15♀♀. 同上, 14-VII-1990, 大平採集. 1♀, 三重県津海岸, 6-V-1955, 市橋採集.

引用文献

- 馬場金太郎・岸井 尚, 1957. 新潟県の叩頭虫 (統報), 1956 年度蒐集品に就て. *Akitu, Kyoto*, **6**: 67-76. [記録では *Negastrius quadrillum* となっているが KISHII (1976) で訂正].
- CANDÈZE, E., 1873. Insectes recueillis au Japon par Mr. G. LEWIS. Élatérides. *Mém. Soc. r. Sci. Liège*, (2), **5**: 1-32.
- KISHII, T., 1976. New Negastrinae with some notes. Some new forms of Elateridae in Japan (X). *Bull. Heian High School, Kyoto*, (20): 17-45, 6 pls.
- 1985. Some new forms of Elateridae in Japan (XVII). *Ibid.*, (29): 1-30, 1 pl.
- LEWIS, G., 1894. On the Elateridae of Japan. *Annls. Mag. nat. Hist.*, (6), **13**: 26-48, 182-201, 255-266, 311-320.
- MIWA, Y., 1934. The fauna of Elateridae in the Japanese Empire. *Dept. Agr. Gov. Res. Inst. Formosa*, (65): 1-189, 9 pls.

Elytra, Tokyo, **19** (1): 43, May 15, 1991

A New Name for *Psephidonus pusillus* Y. WATANABE
(Coleoptera, Staphylinidae)

Yasuaki WATANABE

Laboratory of Entomology, Tokyo University of Agriculture,
Tokyo, 150 Japan

Dr. Lee H. HERMAN kindly informed me that the name *Psephidonus pusillus* Y. WATANABE, 1990, is preoccupied by *Geodromicus pusillus* COIFFAIT, 1983. According to BLACKWELDER (1952, p. 169), the genus *Geodromicus* is a junior synonym of the genus *Psephidonus*. Therefore, I herewith propose a new name for my *Psephidonus pusillus*. I am deeply thankful to Dr. Lee H. HERMAN of the Department of Entomology, American Museum of Natural History, for his kindness.

Psephidonus hermani Y. WATANABE, nom. nov.

Psephidonus pusillus Y. WATANABE, 1990, Mem. Tokyo Univ. Agr., **31**: 279 [nec COIFFAIT, 1983].